

政治意識研究の歴史とその展望

木村 純

日本大学大学院総合社会情報研究科

The research history of political consciousness and its future outlook

KIMURA Jun

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

The purpose of this article is to present an overview of the research history of political consciousness. There are many problems of the research method though a lot of research projects which have been executed in the world. I also propose a new framework for the study of political consciousness, which based on the idea of folk tale analysis.

政治意識とは

政治意識の定義には若干、曖昧なものがあるが、一般的には、政治体系の中で機能する感情や関心、その結果としての意見や態度、信念などを体系化したものの総称であるといわれる。フェルドマン(2006)によれば、これには、(1)政治的正当性の意識や政治不信など、政治一般に対して持つ感情、(2)政治的有効性感覚、政治参加に対する義務感など、政治に対する自己の関わり方についての態度、(3)環境や福祉、外交問題への関心など政治的な争点に対する態度、(4)政党支持の態度、などがある(フェルドマン 2006 p.22)。また、一見、非政治的なもの、たとえば、権威に対する態度、国家に対する態度、集団への参加に対する態度などであっても、政治に関して大きな意味を持つ場合は政治意識に含める場合がある。また、政治意識の有無または高低を扱ったもの、たとえば、政治的無関心、政治的疎外、政治的シニシズムなどを政治的有効性感覚という概念のもとに、補足的に政治意識の関連領域ととらえる見方もある。

政治意識とは別に、政治的態度という用語も用いられることがある。この用語の基礎になっている態度概念は心理学においては、「認知」「感情」「行動」の三要素から成るものとされ、当然、政治的態

度とは、政治的な対象に対するそれら三要素からなる概念ということになる。ただし、これも広い意味で政治意識と同義、あるいは政治意識に包含されるものと考えられる。

本論文では、この政治意識の概念の広範さや曖昧さを踏まえつつ、ゆるやかに政治に関する意識全般を示す概念ととりあえず定義して、以後の論をすすめていく。

政治意識研究のはじまり

政治意識を様々なタイプやカテゴリーに分類しようとする試みは、有史以来、経験的な観点から、いろいろな試みがなされてきた。

たとえば、1789年のフランス革命時の三部会では、貴族は国王の右側に、「第3身分」と言われた平民などは国王の左側に着席した。それにならい、1792年のフランス国民公会議では、議長席から見て右側に王政復古を求めるジロンド派、左側に共和制を支持するジャコバン派が座った。このことから、「左翼(left wing)」と「右翼(right wing)」という対比が生まれた。

これは特定の歴史的、政治的状況下でたまたま生じた状況であるが、以後はこれにならい、人類の進歩という観点から、「進歩的」であるかどうか

よって、政治的な立場や態度を左翼から右翼へ並べるということが起こってきた。すなわち、「左翼」は、既存の制度を平和的・暴力的な方法にかかわらず変革していこうとする立場であり、一方の「右翼」は、現在の支配的な体制・制度を維持していこうとするものであり、場合によっては現体制から旧体制への復古や反動を含む立場とされた。

科学的分析の対象としての政治意識

その後、上記のような直感や偶然に基づいた政治評論的把握ではなく、科学的・理論的に政治意識を把握しようとする立場もみられるようになった。

政治的意識の次元がどのような要素で構成されているかについては、主に政治学、政治心理学の分野で様々なモデルが提示されている。こういったモデルは経験的な実証研究をふまえている場合もあるが、研究者が仮説的に構成した理念的なモデルもある。それは従来から使用されてきた「保守－革新」次元、「左翼－右翼」次元をもとにしたものが多いが、独自の考察を含めている場合もある。どのような理論的背景に基づいてモデルが構成されているのか、という問題は興味深いものである。ここでは、代表的なパターンを取り上げて、その内容と問題点を検討する。

イデオロギー、思想、政治的立場などに基づいて構成した政治意識モデル

イデオロギー、思想、あるいは何らかの政治的立場に基づいた意識の種類はほとんど無数にあるといってもよいほどである。しかし、それらは何らかの基準に基づいて分類することが可能である。大きな分類方法としては、社会主義、資本主義などというものが広く行われており、これらがイデオロギー次元上の「社会主義－資本主義」次元を構成していると仮定されている。その他にも、ある種の価値観や、民主主義・自由主義・全体主義などの思想内容に基づいた分類が考えられる。

例えば、芳賀(1974)は政治意識について、従来の一次元的な「保守－革新」の次元では解説できないとして、これを明確に認識するために、1.復古(国

粹、右翼、ファッショ)、2.リベラル、3.左翼、の三つの分類を試みている。そして、これに基づき、それに対応する政党(1974年当時のもの)の思想的位置づけを次のように整理している。

- 1.復古 ————— (右翼団体など)
- 2.リベラル a.自由経済派 —— 自民党
b.民主社会主義派—— 民社党
(ソシアル・リベラル) — 社会党右派
- 3.左翼 a.既成左翼 —— 社会党左派
共産党
b.新左翼 — (通称過激派集団など)

上記の分類は経験的に理解可能なものであり、政党の位置づけとして限定して考えれば、一応妥当なものと思われる。しかし、このような分類が一般的な政治意識の分類において、どの程度の妥当性があるか、ということはさらに考察されなければならないだろう。例えば、この分類においては少なくとも、経済的問題、民主主義、特殊な政治運動、の三つの異なった要素が含まれているように思われる。これらを半ば恣意的に組合せ、構成したモデルが有効であるかどうかは明確ではない。そういった不明確さは、このような理念的なモデルにはいつもつきまとう問題である。

このように政治意識を理念的に分類するのではなく、社会調査などにおける経験的なデータを客観的に分析した上で実証しようとする立場もある。しかし、そういった場合においても、依然として問題は残る。政治意識を実証的に研究する場合、およそ、次のような問題点があると思われる。

調査項目の網羅性の問題 調査項目が、政治意識における全ての要素を網羅しているかどうか、という問題は常に存在する。操作的にいくつかの項目を設定しても、それのみで、可能な全ての政治意識の様相であると見なすわけにはいかない。この問題に対処するのに三つの方法がある。

(1) できるだけ多くの分野から、多くの項目を総花的に並べる方法

こうすることによって重要な問題が欠落する可能

性のある程度少なくすることができるが、それだけ調査項目が膨大になり、実用に適さない面も出てくる。

(2) ある特定の比較的重要と思われる次元を設定し、それに沿って項目を収集する方法

政治意識に関するほとんどの研究では、経済的分野、非経済的分野にいくつかの特定のテーマを設定して、それに基づいた項目を収集している。最も一般的な方法といえよう。

(3) 何らかの、核(core)になる信念や価値観（「民主主義」「自由主義」など）を設定し、それに沿って質問項目を収集する方法

これは(1)(2)などが、因子分析などで操作的にイデオロギー次元に到達する技法であるのに比べて、あらかじめ政治的イデオロギー内容の中核部分を仮定して、そこから質問項目の収集、分析等を行うものである。この方法は実際の政治的イデオロギーの内容に即した方法、という位置づけもできる(Scarborough, 1984; Feldman, 1988)。

政治意識の強度の問題 同じ調査項目であっても、中心的で強度の高い分野やテーマもあり、また逆に周辺的で強度の弱いものもあり、それは個人によって異なっている。また、一般に中心的なものは他の政治意識項目と緊密に結びついているが、周辺的なものは結びつきの度合いが少ない。

これについては、項目ごとに、その強度や自分にとっての重要性などを訊ねるか、あるいは相関分析などで、一次元的な構造がみられるかどうかを検討する、などの方法がある。また、政治的関心、政治的有効性感覚の項目などを別個に設定し、それによって間接的にある個人の全般的な政治意識の強度を推定する方法もある。主に後者の便法を用いることが多い。

以上の問題は、政治意識に実証的なアプローチをする際には、常に考慮する必要があると思われる。

現状に対する満足、現状からの変化の意図の程度で構成した政治意識モデル

前節でみた分類の方法とは別に、政治意識のイデオロギー的な内容を考えず、現状(Status Quo)の評

価、また現状をどの程度変化させるかということの程度、といった要素のみでも、政治意識のモデルを構成することができる。この方法は現在、あまりにも混乱している「保守－革新」の概念を単純に定義する際にしばしば用いられる。例えば、松崎(1990)は「既存の体制を維持しようとする志向」を保守、そして「既存の体制を変革しようとする志向」を革新と規定している。この場合、既存の体制とは「政治に限らず、経済・社会・文化などの諸所の領域において、現在の状態をもたらしている仕組みやルールの中の基本的、体系的なもの」である。

Baradat(1984)のモデルは、政治意識における、この「現状維持－変化」の次元に注目したものである。それは図1のような一次元のもので、それぞれのレベルに、従来使用されてきた政治意識の用語を対応させている。

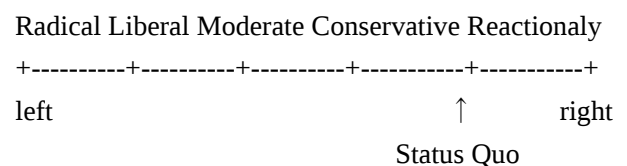


図1 政治意識のスペクトル(Baradat, 1984)

それぞれのレベルの簡単な説明は以下の通りである。

(a) ラジカル(Radical) : 左翼の極端主義。現在の政治システムにたいへんいらだち、不満を持っている。根本的かつ、迅速な改革を要求する。暴力の使用も辞さないという場合もある。

(b) リベラル(Liberal) : システムのある側面にはかなり不満であるが、基本的な特徴については支持している。迅速で、かなりの程度の変化を要求しているが、革命的というほどではない。人間の能力に対する信頼をもち、人間は合理的で基本的には平等な存在であると信じる。政府は人間の幸福を増進せねばならないものと考え、そのためには私的所有権の公的分野での使用も可とする。

(c) 漸進主義(Moderate) : システムにはかなり満足している。改革しなければならないものもあるが、改革は皮相的に、ゆっくりと漸進的に行われるべき

であると考え。そうでなければ、かなりの程度満足している社会を破壊してしまうからである。

(d) 保守主義 (Conservative) : 現状にたいへん満足している。人間の理性の力に懐疑を抱いており、その改革への能力を疑問視している。伝統や確立された制度を尊重し、現状のゆっくりとした、皮相的な前進をむねとする。所有権を重視する。権威主義、エリート主義などの志向があり、秩序と安定を求める。

(e) 反動主義 (Reactionary) : 反動的な態度を持つ。過去の制度や価値観の復古を求める。

Baradat のモデルは (a) から (e) まで、一次的に配列されているが、以上のように検討すると、いくつかの別個の要素によって成り立っていることがわかる。それは (1) 現状に対する満足度、(2) 変化への志向性、(3) 特殊な価値観、信念である。(1) と (2) は、この「現状維持－変化」のモデルの基本的要素であると思われる。一方、(3) は、「現状維持－変化」とは無関係の別個の要素であり、(1) (2) とは内容を異にする。次にこれら三つの要素について考察する。

現状に対する満足度 現状に対する満足度が政治意識の一要素であることは疑いがない。多くの場合、現状に対する満足度は現状 (Status Quo) への支持、埋没という点で、保守主義の基底的要因となる。例えば、秋山 (1987) は現代青年の保守化傾向の要因として、これをあげている。逆に現状に対する不満は変化への要求の前提となる。

変化への志向性 変化への志向性はさらに以下の二つの要素に分解できる。

(1) 変化の方向 : Baradat の図式では図 1 で現状 (Status Quo) を中心として二つの方向への変化を示している。一方は進歩の方向への変化であり、一方は反動の方向への変化である。

(2) 変化の程度 : 次に、変化の程度として、変化の速度、変化の深さ、変化の手段、がある。変化の速度は、その変化が急速である場合から、まったく変化がない状態までの次元を形作ると思われる。また、変化の深さはその変化が根本的なものから、皮相的

なものを経て、まったく変化がない状態までの次元を形作ると思われる。変化の手段は、選挙といった合法的、制度的なものから、非合法的、暴力的なものへという次元である。

いずれも、現状維持志向の状態から離れ、両極に近づくにつれて、その程度は大きくなる。

これらの変化の程度の次元には、おそらく相関関係があるだろうと思われる。

特殊な価値観、信念 Baradat のモデルは、いわゆるイデオロギーや政策とは関係のない、現状に対する満足、変化への志向性といった次元で構成されている。しかし、Baradat はこの次元上のあるレベルにおいて、ある特定の価値観、信念との結びつきも示唆している。例えば、一般的に私的所有権の重視は「右翼」に、個人の権利は「左翼」に、結びついているのだとしている。しかし、これらの価値観、信念はむしろ補足的なものであり、一応、これらは別の次元として考察した方がよいと思われる。しかし、現実的な問題として、あるレベルにはある特殊な価値観や信念が付随している可能性は常にある。

複数の次元を用いて多次元に構成した政治意識のモデル

ある基本的な次元をいくつか取り出し、それを組み合わせることで政治意識の類型を作り出す方法がある。大別して、基本的な次元の抽出を研究者が主観的に行った理念的な類型と、因子分析法などで見出された次元で構成する経験的な類型がある。理念的な類型は例えば、Lowell (1923) の「現状肯定－現状否定」、「悲観－楽観」を組み合わせた類型、Hayek (1960) の「自由主義－全体主義」、「民主主義－権威主義」組み合わせた類型などがある。これら理念的な類型は分析概念として有益である場合もあるが、実証的研究に基づいていないため、現実の政治意識の説明に際しての有効性に疑問が残る。

一方、経験的な方法による政治意識の類型化は、科学的な政治意識研究において、最も実り多く、かつ学術的にも重要なものであるといえる。もっとも、経験的な方法による類型であっても、結果は研究者の調査項目の選択や解釈によって差がみられるため

に、必ずしも一貫した結果は出ていない。しかし、山田(1990)はむしろ、経験的な類型の類似性の方に注目し、大体において、飽戸(1966)のいう態度の基本次元である内容 (content) と強度 (intensity) に該当する次元が、どの研究にも共通してみられる、としている。

この分野の研究の嚆矢といえるものは、Thurstone & Chave(1929)による、社会的態度の因子分析的研究であろう。彼らは社会的・政治的項目を因子分析し、「戦争」「愛国主義」「教会」などの語句に対する態度をもとに、「保守主義 対 急進主義」、「ナショナリズム 対 反ナショナリズム」という二つの一般因子が政治意識の基本的次元であるとした。

多次元的な類型で興味深い視点は、理論的にはまったく正反対のイデオロギー、あるいは思想において特にその極に近い部分で、共通のものがみられるというものである。こういったモデルとしてはEysenck(1957)の図2のような、「保守－急進」、「硬心－軟心」の二次元モデルがよく知られている。すなわち、保守や急進の極端なタイプは、硬心という心理的特徴においては類似しているということである。

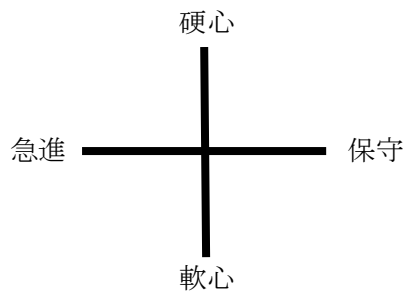


図2 政治意識の二次元モデル(Eysenck, 1957)

このようなモデルは、政治意識の基底にある種のパーソナリティ傾向を想定するモデルに多くみられるとされている(McClosky & Chong, 1985)。たとえばEysenckの場合は「硬心－軟心」の部分が、その個人のパーソナリティ要素である。

政治意識とパーソナリティとの関連研究としては、ほかにAdornoら(1950)による権威主義的パーソナリティ、あるいはRokeach(1960)による独断主

義 (dogmatism) の研究などがある。

政治意識の最良のモデルとは

政治意識の様々なモデルを概観したが、人びとの政治意識の実体を把握したものとしては、どのモデルが最良といえるのだろうか。もちろん、研究の視点によっても異なってくると思われるが、この点について検討してみる。

まず、イデオロギー、思想、政治的立場に基づいて構成したモデルは、その内容の多様性という点から考えると、心理学的に一次元的な次元を構成するというよりも、むしろカテゴリーカルなものになる傾向があると思われる。その中では資本主義イデオロギー、社会主義イデオロギーなどは、「資本主義－社会主義」という一次元的な次元を構成している可能性があり、実際イデオロギーの理論的な研究においては、それを仮定している場合がある。しかし、一口に資本主義イデオロギー、社会主義イデオロギーといっても、「公平化」や「国家の経済への介入」など、いくつかの下位要素に分解できるはずであり、それらの下位要素の間に全て明確な関連がある、という保証はない。

一般に、教育程度の高い者、政治的掛かり合い (political involvement) の高い者は、個々のイデオロギー要素間の整合性が高いといわれているが、実証的な研究によれば、認知的に高いイデオロギー整合性を持っている者は、評価法にもよるが、全サンプルの10%未満に過ぎないといわれている(Converse, 1964)。

一般的な政治意識のなかに、明確な「資本主義－社会主義」イデオロギー次元のようなものを見出すのは困難があると思われる。

一方、現状に対する満足、変化への志向性で構成するモデルは、心理学的に一次元的なものになる可能性が高いと思われる。これらの下位要素についていえば、「特殊な価値観、信念」など、を除外すれば、「現状に対する満足感」と「変化への志向性」は一次元的な連続体を構成するであろう。一般的に、現状に対して不満のある人は変化の意図が強いものと思われるからである。

しばしば、イデオロギーや思想の内容と現状に対

する満足、変化への志向性は、政治意識研究において、理念的にもあるいは経験的実証においても混合されている場合があるが、おそらく別個の要素と考えた方がよいと思われる。その理由として次の点をあげることができる。

(1)「現状に対する満足」、「変化への志向性」はイデオロギーや思想、政治的立場などより基底的な心理的情動であり、その意味では政治意識における一種の準備状態である。

(2)現状に対する満足、変化への志向性が政治意識における一種の準備状態だとすると、それが、どのようなイデオロギーや思想に結びつくかは二次的な問題である。また、イデオロギーや思想、政治的立場とは結びつかず、準備状態のままでもとまるかもしれない。特に現状に満足である場合は、その可能性が高い。

このように考えると、イデオロギー、思想、政治的立場などに基づいた政治意識のモデルは状況特殊的なものになり、一般性に欠ける傾向が出てくると考えられる。一方で、変化への志向性に基づいたモデルは、政治意識の普遍的なモデルを提供できるのではないだろうか。

政治意識研究への認知科学の応用

1970年代以降の認知科学の発達により、政治意識研究にもこの分野の研究の知見が応用されるようになってきた。

そもそも、政治意識、あるいは政治的態度の研究の基本にある「態度」の概念は、先にも見たとおり、「認知」「感情」「行動」の三要素によって成り立っているとされる。そのように考えれば、従来の政治意識の研究にはすでに認知の要素が含まれているといえる。

認知とは、一般的に、知識の獲得過程あるいは知識そのものを意味する心理学的過程である。それは個人の意志や情動といった主観的な過程と対応した、純粋に知的な行為とされる。さらにいえば、知覚、判断、決定、記憶といった情報処理、すなわち外部の情報を取り入れ、ある一定の基準にもとづき体系的に取捨選択し、あるいは構成し、それによっ

て知識を蓄積し、それによって判断や推理をしたり、新しい情報を生み出したりする一連の心理的過程であるとされる。

このように考えると、人間の行動は認知の過程や知識のレベルによって左右されることになる。しばしば人間の認知は現実と対応していないこともあるが、それは情報の不足や誤解、限定的な情報に基づいた誤った判断や推論などによることが多い。

このような観点から、人間が現実をいかに認識しているかが問題とされ、それに影響を与えるマスメディアや人的ネットワークなどが重要な要素として研究の対象に取り上げられることとなる。

このような観点から、新しい政治意識の概念とそれに基づいた研究が登場するようになった。

たとえば、Conover & Feldman (1981) はアメリカの「リベラルー保守」の自己定位などを含む認知的要素に対する評価と、政策や人物、組織といったシンボルに対する関連性の認知が、政治意識を規定しているとして、図3のようなモデルを提示した。

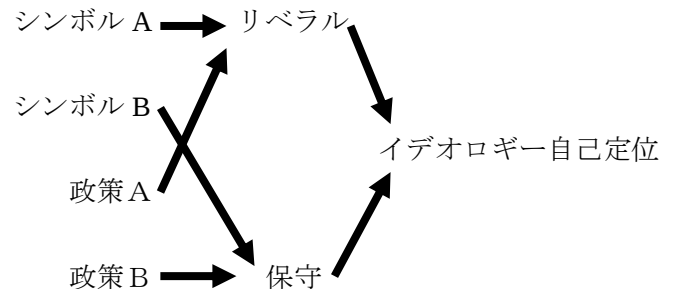


図3 イデオロギー自己定位のモデル (Conover & Feldman, 1981)

これによると、自己定位は「リベラル (liberal)」「保守 (conservative)」などのイデオロギーラベルに対する評価によって規定されており、「リベラルー保守」の次元は必ずしも2極式 (bipolar) の一次元ではないことになる。また、シンボルへの評価、政策の認知は直接的に自己定位を規定しているわけではない。

Conover & Feldman は次の二つのモデルについても検討している。図4は考えられるもう一つ別のモデルであり、イデオロギーラベルへの評価が、自己

定位から派生する、というものである。理論的な流れとしては、むしろこのモデルの方が適合しているようであるが、実際のデータによる分析では、適合度は図3のモデルより劣っている。

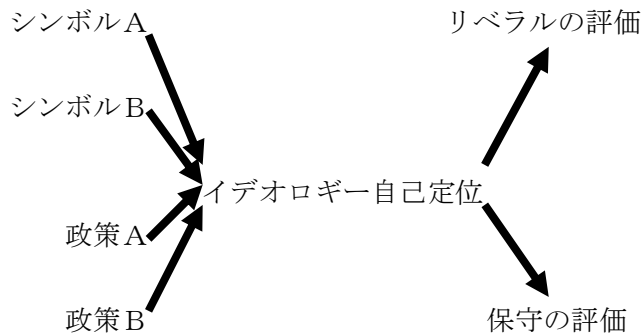


図4 イデオロギー自己定位の対抗モデル1
(Conover & Feldman, 1981)

また、図5のモデルは最も古典的なイデオロギー自己定位のモデルを示したものである。従来のイデオロギー自己定位はたとえ暗示的であるにせよ、このようなモデルを前提としているはずであり、その意味ではこのモデルがイデオロギー自己定位の理論に最も沿ったものといえよう。このモデルの実証においては、中段の「リベラルー保守志向性 (liberal-conservative orientation)」のデータが得られていないため（むしろ、この段階は測定可能なものとしてよりも暗示的 (implicit) に仮定されているものである）、適合性の程度は分からないが、図3のモデルほどの適合度はないようである。

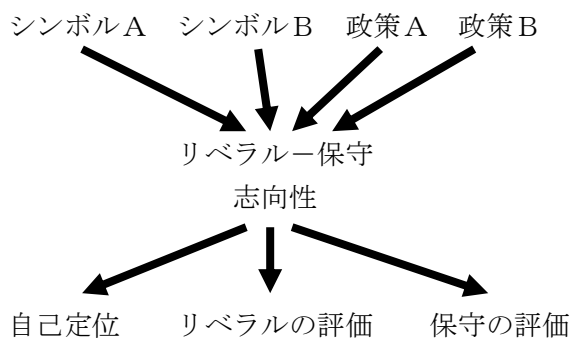


図5 イデオロギー自己定位の対抗モデル2
(Conover & Feldman, 1981)

この研究からいえることは、そもそも、政治的認知を含む政治意識は、「リベラルー保守」といった抽象的な意識があるのではなく、イデオロギー自己定位を含んだ、個々の具体的なシンボルや政策、人物、組織などに対するイメージと評価によって、認知的に構造化され、構成されているというものである。

この研究はアメリカという地域限定もあり、イデオロギー自己定位もアメリカ特有の「リベラルー保守」というものである。ヨーロッパにおける「左翼ー右翼」自己定位や、日本における「保守ー革新」自己定位などにおいても、同様の結果が得られるかどうかは明確ではないが、このような状況は考慮すべき問題と思われる。

また、この研究では説明変数として、シンボルと政策をあげ、前者を評価 (evaluation) 的なもの、後者を認知 (cognition) 的なものとして扱っている。そして、これらの説明変数では、どちらかという政策よりもシンボル、すなわち評価的なものの方が規定力を持っている、という結果を見出している。評価的なものはより感情に関わっている分、規定力が強いといえよう。

しばしば、このような研究で説明変数として使用される項目は、この評価的なものと、認知的なものを混在させており、イデオロギー研究における問題の所在をあいまいなものにしている。そのため、この研究にみられるように、イデオロギーにおいて、認知的なものと評価的なものを別個に考察する方法は注目に値するものと思われる。

さて、Conover & Feldman の問題意識をさらに進めて、「右翼」「左翼」「保守」「革新」などの、イデオロギーラベルがそれぞれどのような価値観、政党支持などと関連があるのか、という問題を検討した研究がある。

Laponce (1972) によれば、「若者 (young)」「進歩 (progress)」などのシンボリック的語句は、「右翼」と「左翼」への自己定位で、それぞれ異なる文化的様相を帯びている。一般に「右翼」「左翼」との関連で安定して述べられる語句には、社会階層、宗教的なものなどがある。

このような観点をさらに推し進めて、感情的な評価と結びついた政治的なアクターによって政治的認知が構成されているとする立場もある（池田1997）。池田は抽象的な政治意識ではなく、人々のより現実に即した「政治的リアリティ」という言葉で、これを説明している。

これまでの政治意識研究の問題点

しかし、これら従来の政治意識研究は、いまだ不十分である。まず、経験的な政治意識の研究の主流として、因子分析的な研究に基づく政治意識の理論があるが、人間の政治的な思考の分析に応用するにはあまりに大まかで、かつその思考の過程の詳細が明らかになっていないという問題点がある。そのため、ある次元が見出されても、それがどのように具体的な行動に結びついているのかははっきりしない。また、実際の有権者の政治的思考からは乖離しているように見えることもしばしばある。そのため、新しい問題や状況が出現するたびに、新しい項目を加え、そのつど新しい次元を見出していくという形になる。

また、認知心理学的研究は、これらの欠点のある意味で克服したもので、個々の有権者の頭の中にどのような政治的な認知があるかということを具体的に明らかにしていく点ではより現実性が高いが、それが行き過ぎて、単なる原子論的な分析に終わってしまうという欠点がある。すなわち、基本的には特定の問題あるいは特定の有権者の個別の分析にとどまり、その内容も静的で事後解釈的なものになってしまうのである。そのため、新たな問題に対して発展的に応用したり、有権者の心の動きのダイナミックな様相をとらえることが十分にできないという問題がある。

以上をまとめると、従来の政治意識の研究には次の問題があるといえよう。

- (1) 新しい問題が出現した時に、従来の研究枠組みによる知見では対処できない
- (2) 従来の研究枠組みによる知見に基づき予測すると、実際の結果との相違が出る
- (3) 世論調査の結果の解釈が大まか、あるいは見当

はずれになる

新しい政治意識研究の展望

逆にいえば、この問題点が解消できれば、次の効果があるということが言えよう。

- (1) 実際の有権者の思考の過程の現実に近い政治意識のモデルを提示できる
- (2) 政策提言の際、有権者に効果的な説明ができ、理解を得やすくなる
- (3) 新しい問題に対する有権者の認知や行動を的確に予測できる

新しい政治意識のとらえかたとして、「物語」というキーワードを挙げたい。それは、先述のような従来の政治意識研究で提示された政治意識とは異なり、より現実に即しており、またダイナミックであり、かつ応用に際しての有効性も高いとらえ方である。

すなわち、政治意識は漠然とした「保守－革新」に代表されるような次元によって成り立っているのではなく、また、個々ばらばらの認知（政党、政治家、政策、国家など）の集合体でもない。個々の認知が、有機的に結合し、一つのパターンとしてある一定の意識の流れを作るような、全体として動的なものとしてとらえる必要がある。これを「物語」という言葉で表すのである。

政治意識を「物語」としてとらえた時に、仮説として以下のものが提示できる。

- (1) 個々の有権者には、それぞれの独自の政治的な思考（物語）がある
- (2) その政治的な思考（物語）はいくつかの典型的なパターンに分類できる
- (3) その政治的な思考（物語）は時間やテーマの種類を超えて普遍的に応用される

ここでいう「物語」は社会学や現象学の言説分析や状況把握において使用される「物語」の概念に近いが、通常の意味で使われるところの物語と同様にさまざまな要素からなっている。それは、たとえば、登場人物、舞台、相互作用、展開、結果といったものである。

これらが、どのように組み合わせたり、どのような

状況で相互作用し、展開し、特定の結果をもたらすと考えられるのかを分析することが、ここでいう政治意識における「物語」の研究になる。基本的に、人間の思考は千差万別で、人間の数だけあるはずだが、上記のように、特に政治意識に関してはいくつかのパターンに縮約することが可能であると思われる。この政治行動や政治意識を分析する際に有効な物語のパターンを探るのが今後の政治意識研究の大きな目的となるであろう。また、それらの物語をカタログ化することによって、テーマや時代、あるいは地域の制約を超えた、分析の道具となり得ると考える。

たとえば、消費税の値上げをやむを得ないと思っている人の物語は次のようなものである。基本的な登場人物は、自分、政府、社会といったものであり、また、考えられる状況は現在の社会の姿や公共の福祉といったものであり、予想される結果は、値上げしたことによる福祉の充実といったことである。これらを頭の中に配置し、組み合わせ、展開することによって、「消費税の値上げもやむを得ない」と考えたとすれば、その思考の過程がその人にとっての物語である。これは消費税という特定の問題についての特別な思考であるが、「公共の福祉」というストーリーとして一般化させれば、当然、その人の他の問題の解釈や行動にも応用されるはずのものである。これを、その人の「物語」と呼ぶ。これと同じ「物語」を共有する人は他にも大勢いるはずである。

実証研究においては、仮説の通り、人はこの同じ物語を他の問題にも応用する傾向があることを検討する必要がある。たとえば、Aの問題に特定の物語Xを適用した場合は、それとは異なるBの問題にもその特定の物語Xを適用する傾向があることが見出せると仮定できる。もしそれが証明されれば、さらに別のCの問題についても、その特定の物語Xを適用するはずであると、かなりの確度をもって予測することができるであろう。

これらの個々の有権者のそれぞれが持っている物語が、従来言われていたような、「あの人は保守的だ」とか「あの人は反体制だ」などという、いわゆる政治意識の実態であると思われる。その意味で、

従来の研究も方向が間違っていたわけではないといえる。ただし、そのとらえ方が大まかに過ぎ、方法論的にも洗練度が低かったのである。今後はそれをふまえた政治意識研究が求められていくであろう。

参考文献

- Adorno, T. et al. (1950). *The authoritarian personality*. New York: Harper.
 (T.W.アドルノ著；田中義久、矢沢修次郎、小林修一訳 (1980). 権威主義的パーソナリティ 青木書店)
- 秋山登代子 (1987). 保守化時代の政治意識 NHK放送文化調査研究年報, 32, 303-322.
- 鮑戸 弘 (1966). 政治的態度の構造に関する研究 I 心理学研究, 37, 4, 204-218.
- Baradat, L. P. (1984). *Political ideologies. their origins and impact*. New Jersey: Prentice-Hall.
- Conover, P. J. & Feldman, S. (1981). The origins and meaning of liberal/conservative self-identifications. *American Journal of Political Science*, 25, 617-645.
- Converse, P. E. (1964). The nature of belief system in mass public. In David E. Apter (Ed.), *Ideology and discontent*. New York: The Free Press.
- Eysenck, H. J. (1954). *The psychology of politics*. London: Routledge & Kegan Paul.
- フェルドマン・オフエル (2006). 政治心理学 ミネルヴァ書房
- Feldman, S. (1988). Structure and consistency in public opinion: the role of core beliefs and values. *American Journal of Political Science*, 32, 416-440.
- 芳賀 綏 (1974). 現代政治の潮流 人間の科学社
- Hyek, F. A. (1960). *The constitution of liberty*, London: Routledge & Kegan Paul.
- 池田謙一 (1997). 転変する政治のリアリティー投票行動の認知社会心理学 木鐸社
- Laponce, J. A. (1972). In search of the stable elements of the left-right landscape. *Comparative Politics*, 4, 455-475.
- Lowell, L. (1923). *Public opinion in war and peace*.

Cambridge, Mass : Harvard University Press.

松崎哲久 (1990). 自民党は革新政党である！ 天下
国家の語り方 (別冊宝島 115) 宝島社

McClosky, H. & Chong, D. (1985) . Similarities and
differences between left-wing and right-wing
radicals. *British Journal of Political Science*, 15,
329-363.

Rokeach, M. (1960). *The open and closed mind*. New
York: Basic Press.

Scarborough, E. (1984). *Political ideology and voting:
An exploratory study*. Oxford: Clarendon Press.

Thurstone, L. L. & Chave, E. J. (1929). *The
measurement of attitude*. Chicago: University of
Chicago Press.

山田一成 (1990). 現代大学生における政治的疎外
意識の構造 社会心理学研究, 5, 50-60.

(Received: May 31, 2009)

(Issued in internet Edition: July 1, 2009)